

# 対話を深めるための思考を可視化する表現活動

## ～「思考の作戦基地ノート」の活用～

山中 昭岳

対話を深めるために互いの思考をみえる形にする表現活動を進めてきた。グループという少人数においても言葉のやりとりだけでは一人ひとりの学びへと深まらない。それぞれの思考がみえる形として表現され、またそれらが一元化され、そこを中心として話し合いが進められる必要がある。そこで、グループに1冊のノートを導入した。このノートを子どもたちとともに「思考の作戦基地ノート」と名付け、子どもたちが対話をしながら互いの考えや思いをかく（書く・描く）場としてグループでの話し合いにおいて活用した。本研究では、6年総合的な学習の時間「自然とのつきあい方をさぐる」での活用場面において、話し合いの流れを会話の言葉だけでのやりとりで終わるのではなく、目に見える形で残すことで新たな視点が見いだされ、さらに一人ひとりの考えが書き表されることで、話し合いの論点が焦点化され、そのことでそれぞれの考えが深まることが明らかとなった。

キーワード：総合的な学習の時間、対話、思考、グループ、表現活動

### 1. 研究の背景

#### 1.1 対話の必要性

総合的な学習の時間では、答えが多様で正答が定まらない課題に対して、みんなと協力し、互いに知識や知恵を出し合いながら解決していく学びを創っていく。他者とのかかわりが重要になってくる。他者とのかかわりにおいて重要なのが対話である。対話の基本は、変わることができる自分を前提としてもつことである。自分の価値観だけでやりとりをする会話、価値観の対立でやりとり（たたかい）をする討論・議論、これらとは違い対話は価値観の違いを楽しみ、それを受け入れ、歩み寄りのプロセスを大切にしている。このことは、探究する学びへと発展させていくために必要なのである。

#### 1.2 総合的な学習の時間の提案とのかかわり

##### 【総合的な学習の時間】提案

探究する学びを創る  
- “ほんまもん” 体験を通して Change する子ども -

探究とは、問題解決的な活動が発展的にくり返されていくことであり、物事の本質を探って見極めようとする一連の知的営みとされている。すなわち、子どもが自らの課題に主体的に向かう姿である。

探究する学びを創るため、“ほんまもん” 体験が大切であると考えている。“ほんまもん” 体験とは自然への感性を磨くことと捉えており、村山(2009)は、「自然への感性」について以下のように述べている。

「感性」とは、価値あるものに気付くことを意味する。それは、環境にかかわりながら生きる人間の本能的な能力であり、単なる認識能力ではなく、価値判断能力であるといえる。感性は、その後の知性や感情の働きを起こさせる初発であり、刺激に対する敏感さである。つまり、刺激に反応するといった受け身のものではなく、積極的に働きかけていく能動的なものである。

そして、その“ほんまもん” 体験の場としてまがたま池を設定した。まがたま池を核とした様々な自然環境へのかかわりが自然への感性を育むのである。

和歌山県は自然が豊かな県である。これからの和歌山、いや日本、地球において、豊かな自然を守っていくことと同時に、そこに子どもを近づけていくことも大切である。子どもを身近な自然に近づけていくことにより、子どもは自然の中で五感を使いながら、様々な自然に親しみ、それに働きかける。こうした自然とのやりとりにより子どもの自然への感性が豊かになっていく。

やがて、子どもの心の底にあるものが自然を選び、それによって逆に全人的にゆさぶられ、心がつくられていく。このように自然と自分との往還により、自己の存在を確かめることになるのである。人間にとって、自己の存在とは、世界との結び付きにあることを意味する。

自然への感性が、自然を含めた世界との関係を見いだすことになり、それが自己の存在を確かめることになるのである。

新たな自分を発見した子どもたちの学びを、さらに深めるために必要なことは先にも述べた他者とのかわりである。すなわち、対話が重要である。対話を行っていくためには、互いの思考をみえる形で表現していかなければならない。動機付けと振り返りを大切にしたい。した“ほんまもん”体験では、自らがどのようなことに気づき、何に追究していきたいのかということを出しななければならない。そしてそれらを互いに伝え合う活動が大切なのである。そこで、互いの思考を伝え合う場面において、思考を可視化することで学び合いが促進するのではないかと考え、「思考の作戦基地ノート」の活用を試みることにした。

## 2. 研究の枠組み

### 2.1 目的

グループでの話し合い活動において、互いの思考をみえる形にし、共有する場としての「思考の作戦基地ノート」を導入することで、課題解決にむけた対話が深まることを、実際の授業場面における子どもたちの表現活動の分析によって検証することを目的とする。

### 2.2 研究対象

#### 2.2.1 フィールドの概要

6年C組 (男子18名 女子17名 計35名)

#### 2.2.1 研究対象の単元について

単元名：自然と人とのつきあい方をさぐるろう！！

ー“まがたま池”と地域をつなぎ、そして未来へー  
 <単元の概要>

まがたま池は人工の池であり、人がかかわっていかねばその自然を保つことができない。どのようにかかわっていけばよいのかについて考えることで、自然とのつきあい方をさぐることになる。

まがたま池での体験活動を通して、様々な問題点に気付く。その解決策を考えていくことは、自然について知るだけでなく、よりよい自然環境にしていこう、地球市民として自らが取り組もうとする心情や実践態度を身に付けることにつながる。と考える。

このように問題点から自らの課題へと変容させ、友だちや専門家などと協力し調査を行い、話し合い、課題を解決していく活動は、子どもたちに他者とともに新しい考えをうみだしていく必要性を与える。  
 <対話を生み出すちがひ>

自然と人とのつきあい方は、その場その場の自然、人の生活の様子等、様々な要素によって異なる。また、それぞれの立場によって考えにちがひが出てくる。このようなちがひが生まれてくるのが重要である。ちがひを受け入れ、歩み寄りながら解決へ向

かう対話を生み出していく単元計画が必要となってくる。

### <単元計画 (全18時間)>

段階と時間	活動内容と子どもの姿	付けた力の具体化	支援
第1次、2時間	<p>今までの活動を、ふりかえってみよう！！</p> <p>たっぷり自然体験をやったし、いろんな人にも出会った！！</p> <p>まがたま池・たんぼづくり、ピオトップ、釜子、熊野川へ、家のまわり調査 など。</p> <p>みんなの家のまわりの様子って？</p> <p>自分たちが卒業したらどうなるんだろう。</p>	<p>a. 何事にも挑戦しようとする態度。</p> <p>b. 自ら課題を設定し、追究し、表現する力。</p> <p>c. 仲間と協力して、新しいものを生み出す力。</p>	<p>① 教師の背面掲示を活用し、時間の流れにそって写真を活用しながら活動を振り返る。</p> <p>② デジカメで撮影してきた写真を共有する編を準備する。</p> <p>③ 一人一人の身のまわりの様子を撮影し、掲示して発表する。</p>
朝の会のスピーチで発表しよう。 <p>デジカメを持って帰り、家のまわりの自然調査を撮影して、みんなに伝える。</p> <p>&lt;問題点&gt;</p> <p>まがたま池はほっておくと汚くなる。たんぼは5年生がいいんだと思うんだけどなあ。みんなの家のまわりとまがたま池ってつながるの？</p>	<p>a. 自分たちの考えや思いだけでなく、専門家や先輩、お家の人や地域の人たちの意見や考えをきくよ。優す。</p> <p>④ 体験や調査活動の中での気づきを書き残して明らかにしておき、探究する視点へとつなげる材料としたい。</p>		
第2次、10時間	<p>まがたま池・たんぼを未来へとつなぐには？</p> <p>・どのような組織で？仕組みで？</p> <p>・自分たちの住む地域から学ぼう。</p> <p>・プロジェクトチームで活動しよう。</p> <p>テーマ：まがたま池・たんぼを未来へと残すためには？</p> <p>活動のゴール：自分たちの卒業後もまがたま池・たんぼの活動が続く。</p> <p>提案書をつくらう。</p> <p>新しい委員会を設けよう！！</p> <p>調査委員会の仕事内容に追加してもらおう？</p> <p>自分たちが中学校へ行ってもやればいい。止む、わからない。</p>	<p>b. まがたま池を未来へつなぐという理想をひらいて、探究する視点を算出していく。</p> <p>c. 問題点をもとに自分たちの活動のゴールについて話し合い、決定する。</p>	<p>⑤ 自分たちの考えや思いだけでなく、専門家や先輩、お家の人や地域の人たちの意見や考えをきくよ。優す。</p> <p>⑥ プロジェクトチーム同士のつながりを意識して活動できるように促す。</p>
第3次、6時間	<p>自分たちの考えを、伝えよう。</p> <p>・先生たち、全校のみんなへ。</p>	<p>a. 自分たちの考えを伝えたいという意欲をもつ。</p> <p>b. 伝える相手によって発信方法を工夫する。</p>	<p>⑦ 相手意識・目的意識を確認しながら進める。</p>

図1 単元計画

### 2.3 研究方法

総合的な学習の時間における「学びの質の高まり」とは、自分の中に新しい世界が生み出されることである。新しい世界とは、考えの広がりや深まり、新たな視点が生まれたり、出会い直しがあつたりと、子どもたち一人ひとりによって、さらには毎時間ごとによってちがひがある。

このことはまさに本研究における子どもたちがグループでの話し合い活動において、「思考の作戦基地ノート」を活用することで課題に向かう対話が深まることを意味している。すなわち、子どもたち自らが解決したい、みんなで考えたいと思う課題を見出すことができることをねらいとしている。

そこで、各教科のグループでの活動において「思考の作戦基地ノート」を活用させ、そして研究対象単元において子どもたちが「思考の作戦基地ノート」にどのような書き込みを行いながら話し合いを進めているかを観察し、その書き込まれた内容の分析を行っていくこととする。

### 3. 「思考の作戦基地ノート」活用の実例

「思考の作戦基地」ノートは、A4サイズ（100枚）であり、グループに一冊わたし、グループでの話し合い活動の場面を中心に、各教科等でも活用している。

<算数科の授業での活用例>

自分たちの間違いのあとが残っており、グループのメンバーが試行錯誤している様子がわかる。そしてここでのよいところとして、間違いを残しており、自分たちの成長を感じることができる。

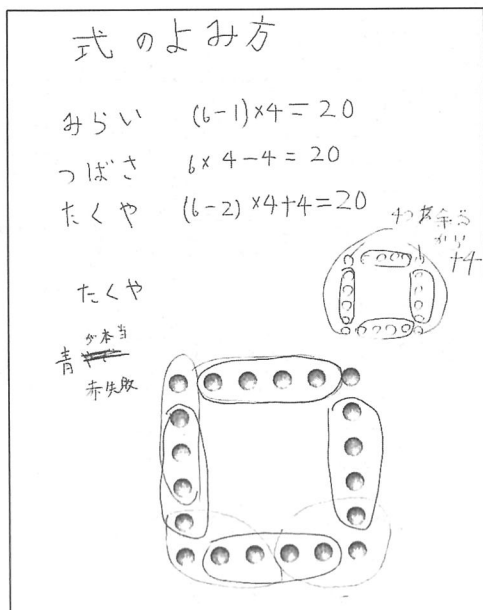


図2 算数科における活用例

<社会科の授業での活用例>

一枚の絵に対して、グループのメンバーが気付いたことを書き込み共有することができている。今まではただ言葉だけでのやりとりでたった一時間のこととして過ぎていたことが、授業が進んでいく中で、もう一度これらの気付きに立ち戻り振り返りの場としての役割も果たしていた。

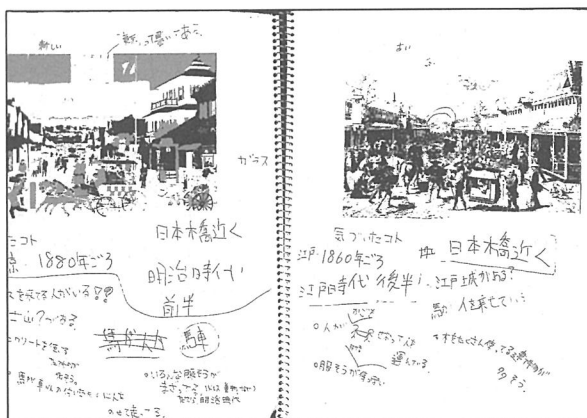


図3 社会科における活用例

### 4. 「思考の作戦基地ノート」活用 の考察

3. で示したように各教科の学習において子どもたちは「思考の作戦基地ノート」を活用し、グループでの話し合い活動で自分たちの思考を表出していくようになっていった。課題に対して気付いたことを書き込むこと、グループのメンバー同士の意見を線で結んでつなげたり、新たに出てきた課題については色を変えて目立つようにしたりと工夫がみられてきた。



図4 総合的な学習の時間における活用例

図4は本単元において、まがたま池・たんぼを残していくために全校の児童にむけてのイベントを行うこととなったが、どういことをすればよいかという課題をグループで話し合っているものである。今までの子どもたちの話し合いでは、何のために話し合っているのかという目的を忘れてしまうことが多かったが、ここに示されているように目的をしっかりと明記しているため話し合いがぶれることがなかった。さらに、それぞれの思考をつなげていくことで新たな課題も見出されていった。これらがグループのメンバー個々の課題となっていく、学びが広がっていったのである。

総合的な学習の時間のように答えが多様で正答が定まらない課題に対する話し合いの流れを、会話の言葉だけでのやりとりで終わるのではなく、目に見える形で残すことでさらに新たな視点が見いだされていった。また、一人ひとりの考えが書き表されることで、話し合いの論点が焦点化され、そのことでそれぞれの考えが深まっていった。

また、グループでの活動において常に「思考の作戦基地ノート」は子どもたちの手元にある存在となり、すべての活動の記録が「思考の作戦基地ノート」に残されていくようになった。一元化されていることで、すべての学習の履歴が集約されており、子どもたちは自分たちの「思考の作戦基地ノート」を見返すことで、自分たちの学びの足跡を振り返ることができるものとなっている。さらに教科で学んだことと結びつけて考えていく姿もみられた。

## 5. 成果と課題

グループでの話し合い活動において、互いの思考をみえる形にし、共有する場としての「思考の作戦基地ノート」を導入することで、課題解決にむけた対話が広がり、そして深まっていくことが実証できた。さらに図5で示すようにこの「思考の作戦基地ノート」は互いの思考を表出し、話し合いの場となるだけでなく、発信のツールとして活用されるようになった。

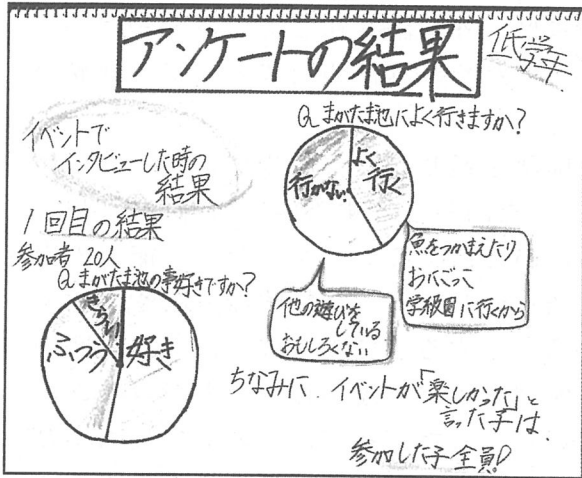


図5 アンケート結果をまとめたページ

図5を作成したグループでは、みんなにアンケートの結果を伝えるために、ただ数字を並べて表現するだけでなく、グラフで表すと見やすくなるという算数科で学習したことを思い出し、算数の教科書をみながらグラフのかき方を思いだしてかいている姿がみられた。

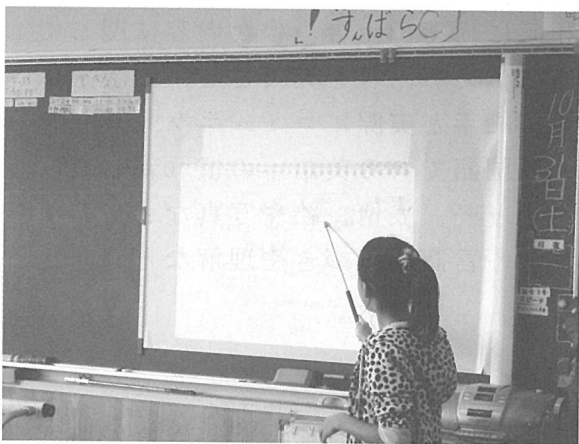


図6 「思考の作戦基地ノート」を活用して発表している様子

そして、グループでの自分たちの話し合いの結果を発表するとき、図6のように「思考の作戦基地ノート」を活用して自分たちの話の流れを示しながら説明している姿もみられた。

さらに、グループでの学びが自己の学びへと深化していく姿もみられた。図7は、総合的な学習の時間に

において活用している個人ノート（CHANGEノート）である。このノートと連動して、グループでの話し合いをもとに自己との対話を行っている。

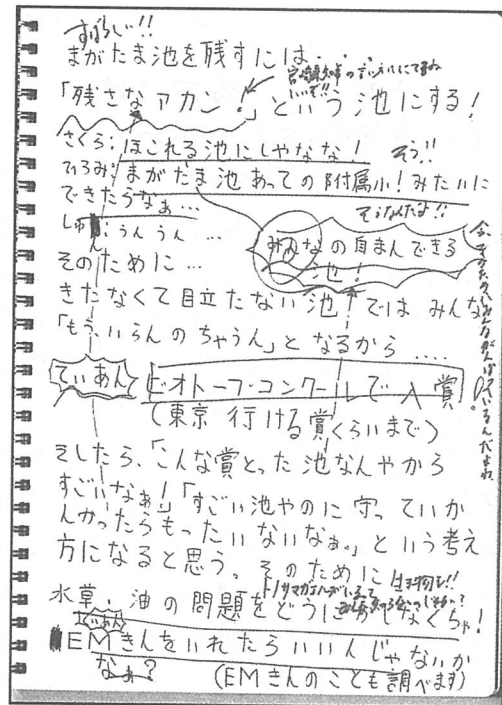


図7 CHANGEノート

グループで話し合われた内容を書き出しながら、自分の考えを練っているのがわかる。このとき「思考の作戦基地ノート」をみながらCHANGEノートに書き込んでいる姿がみられた。他者とのかわりにおける対話から自己との対話へと連動させていることがわかる。

課題として、教師側の手だてとしてはまだ手探りの状態で、子どもたちがどのように活用するかをみている段階である。

### 参考文献

- 村山哲哉 (2009) 「初等教育資料10月号」 「話題」
- 文部科学省 (2008) 「小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」, 東洋館出版
- 村川雅弘・野口徹 (2008) 教科と総合の関連で「真の学力を育む」, ぎょうせい
- 午堂登紀雄 (2008) 「脳を「見える化」する思考ノート」, ビジネス社
- 西村克己 (2006) 「思考を「見える化」する技術」, JUSTSYSTEM